

十九世紀末世界農業恐慌（下）

田中，定

<https://doi.org/10.15017/4150441>

出版情報：経済學研究. 5 (2), pp.109-135, 1935-06-30. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

十九世紀末世界農業恐慌 (下)

田 中 定

目 次

一 工業の發展が農産物に及ぼす影響

I 農業と工業との分離

II 分 析 その一

III 分 析 その二

IV 實證的な例證

二 農産物の價格騰貴と地代、小作料及び土地價格

I 農産物の騰貴との缺狀差

II さらに地代と小作料との缺狀差

III 實證的な例證

IV 地 價 の 昇 騰

三 農 業 問 題

I 農産物の高騰と農民

II 土 地 問 題

(以上前號)

四 アメリカ農業の發展

- I 簡單なる要約
- II 南北戦争と商業的・資本主義農業
- III 老大なる國有地とその開放
- IV 經營規模の擴大
- 五 結び——世界過剰生産

四 アメリカ農業の發展

簡單なる要約

前號では、私は、十九世紀後半に這入つてヨーロッパの舊い國々の農業が當面してゐた局面を分析するのに専念したのであるが、扱て、それは、この小論の全體の上でも、如何なる意義を持つてであらうか。だが、この反省には、次の簡單なる要約が答へを與へてくれるだらう。反省への解答とともに、また、第二段の分析への糸口をも與へてくれるだらう。

——工業の資本主義的な發展にともなひ、その避けえない隨伴現象として、小作料と土地價格とが漸次騰貴する。なるほど、農産物の價格も騰貴する。しかし、それに比すれば、小作料及び土地價格の騰

貴は遙かに顯著である。だから、大農經營は、農産物の價格騰貴によつて利益をうけうる資格をもつものではあるが、いな、さういふ資格をもつ唯一の經營形態であるが、しかしながら、それは、農産物價格の騰貴によつて刺戟される他の一方において、それに比すれば遙かに顯著に騰貴するところの小作料と土地價格とのために強い障礙をうけねばならない。この事情は、工業の知らない農業獨特のものであり、農業において大經營の發展を相對的に遲滯せしめてゐる根本的事情である。要するに、土地問題の重要さは、資本主義的工業の發展とともに増大する。それ故に、ドイツの經營統計で例示的に分析したやうな農業經營の後退過程が進行しはじめたとすれば、それは、資本主義的生産がそれほどまでに土地問題の重要さを前面に押し出した結果にほかならないのである。十九世紀後半に這入つて、ヨーロッパの舊い國々の農業はまさにかゝる局面に當面してゐた。

農業生産の範圍内で、このやうな困難な問題を喚びおこしてゐた一方、工業それ自身も亦、農業問題の重大化にとまなひ、注目すべき一つの困難にたどりついてゐた。すなはち、小作料及び土地價格の騰貴に規定されて、それらの國々の農産物價格は高く維持されてゐたのだから、それらの國々において生活費が高くなり、勞賃が高くなるのは、要するに高い小作料と高い土地價格とが齎らした結果に外ならなかつたのである。従つて、もしも土地問題の解決を遷延するならば、その國の工業は世界市場においてそれだけ伸展を阻まれるわけであつた。しばし繰りかへされた穀物關稅論争がつねに地代論争を伴

つてゐた所以も實にこゝに存する。かやうに、土地問題の壓迫はたゞに農業生産にのみならず工業生産にも加重された。従つてそれを解決することは、工業にとつても一つの重要な課題であつた。

x

x

x

ところで、この簡単な要約はわれ／＼に次のことを示すであらう、——すなはち、土地問題が支えとなつて高い農産物價格が成立してゐるといふのであるが、このことは、土地問題が割合ひに重大でない新しい國々において農業生産をそれだけ刺戟することになるであらう。換言すれば、ヨーロッパにおいて高い穀物價格——穀物の相對的缺乏——が現はれるに至つたといふことは、いまやヨーロッパの資本は食料の供給を世界的規模において確保すべき時代に到達した、といふことを端的に表現してゐるわけだ。要するに、ヨーロッパにおいて資本は土地問題を重大化せしめ、延いて世界的規模における全一的な農業構造を作り出す素地を築きあげたのである。それゆゑに、もしも農業恐慌が現れるとするならばそれは、新しい諸國における農業生産の發展の結果なのであり、従つて農業恐慌は世界農業恐慌でなければならぬのである。世界農業恐慌の成立を説明するための端緒として、われ／＼は、ヨーロッパ舊國の農業生産が當面してゐた局面の具體的な特質をまづ以つて明瞭にして置かねばならなかつたのである。——かくて、新しい國々においてヨーロッパの要求に應じて發展してきた新しい農業の特質を明瞭にすることは、われ／＼の第二段の課題であらう。

II 南北戦争と商業的、資本主義農業

アメリカの農業が躍進しはじめたのは一八六一—六四年の南北戦争中からである。イギリスの輸入する小麦のうち、アメリカから来るものが四〇パーセント以上を占むるやうになり、ドイツとロシアとを蹴落してはじめて首位を占めたのも、實は壯丁の大部分が動員されてゐてさういふことが最も起りさうに思はれなかつた戦争中の出来事であつた。そも／＼何がかゝる「奇蹟」を喚び起したか。「戦争の約一年前、アイオア州の一番早く開けた郡部の一報告に、……農業者たちの中での支配的な意見では、手で種を下し、鋤で土をかける、といふのが玉蜀黍を播く最も良い方法だとされてゐる、と述べられてゐる。この支配的な見解も戦争が始まつた後では行はれなくなつてしまつた。アイオア州でもウイスマンシン州でも労働者は減じ賃金は騰貴した。とりわけ收穫期には立穂を全部取入れるためにはどうでも機械を買入れねばならなかつた……。學校の出缺簿を調べてみると、この機械の操作のために相當の子供たちが學校を休んでゐたことが判る。¹⁾すなはち、農業機械と子供等の労働がわれ／＼の謎を解いてくれるであらう。

犁、玉蜀黍播機、二頭立中耕機、刈草機、刈禾機、蒸汽打穀機など、すでに一八六〇年以前に數々の特許權づきの改良機械が存在してゐたし、これらの發明機械は相當の程度五〇年代にも使用されてゐた。

1) Louis Bernard Schmidt, Wheat vs. Cotton (in Readings of Economic History of American Agriculture), p. 326.

その時代においてすら、アメリカの農業機械の水準は世界最高のものであつたといふことができる。例へば、刈禾機の如きは、一八五五年フランスで農具の共進會が開かれたとき、或る一定の仕事を行ふのにイギリスの刈禾機は七分、フランスのそれは六六分を要したのに、僅かに二二分で充分であつた¹⁾。一人の操作によつて一臺の機械は一日に一〇エーカーから一二エーカーを刈ることができた。當時まだ一般に使用されてゐたといふクレーン大鎌では一エーカーから一エーカー半ぐらいしか刈取れなかつたといふのだから、これに比ぶれば該機の能率の偉大さは推して知ることができよう²⁾。これらの若干の補足的な説明は多數の壯丁が農場から動員されてゐた時期に、それにも拘らず、小麥の生産は却つて擴大したといふ奇現象の據つて來る所以を諒解せしむるに足るであらう。

ともかくも、南北戦争は農業機械の使用を民衆化した。それだけで、もアメリカの自給的な開拓者農業を近代的な商業的農業に轉ぜしむるに充分であつた。何故なら、機械が採用されるならば、機械の能率は従つて農場の大きさも再編成されねばならないし、よしんば農場の大きさは他の條件に阻けられて擴大されえないとしても、特化された單一農業に漸次移行せざるをえぬであらう。従つて、自給の範圍を遙かに超ゆる超過農産物を商品化することこそ機械使用農場の根本的課題でなければならぬ。もちろん、機械使用の増大はただ簡單に壯丁人口の農場離脱によつて説明し終られるものでないであらう。豫めそのためには農場生産物の商品化が相當に進行してゐなければ起らない。だから、機械の使用

- 1) George K. Holmes, *The Revolution of Farm Machinery*, (in *Readings of Economic History of American Agriculture*), p. 361.
- 2) L. B. Schmidt, *Some Significant Aspects of the Agrarian Revolution in U. S.* (in *Readings*), p. 331.

によつて、自給の範圍を超えて巨大な數量が生産されるやうになり、それ故に商品としてそれを販賣することが機械使用農場の重要な關心事となつた、といつても、それは機械がはじめて商業的農業を創設したといふ意味ではない。以前に或る程度發展してゐた商業的農業を背景として機械使用農場は或る程度すでに増大してゐた。それに、たまく、戦争によつて作りだされた戰時的高價——實際「農業者の生産する一切のものが未曾有の高い價格で需要された」¹⁾のである——と勞働力不足といふ拍車加へられて、機械使用の顯著な増大を見るに至つたのである。しかし、かくの如く、ひとたび、大多數の農場によつて機械が採用されるやうになれば、商業的農業は、もはや特殊の農場だけの特殊な形態ではなく一般にアメリカ農業の支配的形態といふところまで伸張してきたわけである。ともかくも、商業的農業の發展に一大轉機を與へたものは、南北戦争であつた。

それのみではない。南北戦争は農、工の分離を促進する上でも決定的な影響を齎らした。そしてこの方面からも農業の商品生産化を拍車した。——「市民戦争中の北軍の兵士の需要は機械化の傾向を促進した。とくに衣服、長靴、單靴、革製品などは、大量に消耗されたので、大工場において規格されて製造されるやうになつた。イングランドやフランスなどに存在したやうな、邪魔な傳統がなかつたので經營上の實驗や新機械の使用は旺盛を極めた。……」²⁾これだけの簡單な説明を聴いても、戦争はアメリカの工業的發展に尠からず影響を齎らしてゐること、而して「家内手工業の形態から工場機械生産への轉

1) L. B. Schmidt, Wheat vs. Cotton, p. 326.

2) Hacker and Kendrick, The United States since 1865. p. 184.

形」の期を劃してゐること、を窺ひ知るに足るであらう。しかし、最も簡単に事態を示してゐるものは次の統計的數字であらう。

アメリカ合衆國における製造業の發展 (單位一、〇〇〇) ¹⁾

年次	工場數	賃銀勞働者數	投下資本額 (ドル)	生産物價値 (ドル)
一八四九年	一二三	九七五	五三三、〇〇〇	一、〇一九、〇〇〇
一八五九年	一四〇	一、三一	一、〇〇九、〇〇〇	一、八八六、〇〇〇
一八六九年	二五二	二、〇五四	二、一八〇、〇〇〇	三、三八六、〇〇〇
一八七九年	二五四	二、七三三	二、七九〇、〇〇〇	五、三七〇、〇〇〇
一八八九年	三五五	四、二五二	—	九、三七二、〇〇〇
一八九九年	五一二	五、三〇六	九、八三五、〇〇〇	一三、〇一四、〇〇〇

すなはち、一八四九—五九年の十年間に比して一八五九—六九年の十年間は明らかに顯著な發展振りを示してゐて、その後の急速な發展の第一歩を劃してゐるのである。だが、工業の發展について詳述することは、農業のそれについてすら輪廓だけをしか述べてゐないところのこの小論においては、もちろん、不可能のことであるが、しかし、これらの概括的な説明によつても、南北戦争は工業の發展に劃期的な影響を及ぼしてゐるといふ程度のことは充分に示されてゐるだらう。のみならず、奴隸解放戦争

1) Hacker and Kendrick, *ibid.*, p. 186.

たるこの闘ひが市民的な北部の決定的勝利に終つたといふことは、アメリカから、黒人奴隷の上に築かれてゐた植民地的な經濟の方法と制度を清算して市民的な資本主義的な經濟生活のために坦々たる途を拓く決定的な工事を完成したことを意味するものである。工業は躍進しはじめ、しがして工業の發展は、當然に、他の側面において、「それ自體で一個の完全な小世界」であつた「市民戰爭以前の開拓農業者經濟の自足的性質」を破壊し、¹⁾従つて開拓者達に對して命令的に商業的農業の發展を要求した。

X

X

X

以上の叙述に一應の結末をつけるならば、——南北戰爭は農業において機械の使用を擴大し、また工業において資本主義的生産に途を拓き、かくてアメリカの農業を自給的な開拓者農業から近代的な商業的農業に轉形するといふ一般的な形勢を打開した、といふことができよう。

ところで、こゝで注目すべきは、機械使用の増加が商業的農業の發展に基礎的に貢獻してゐるといふことである。といふのは、工業生産の資本主義化に應じて、一般に、農業は商品生産化するけれども、しかし、多くの場合は、傳統的な農具と農法とを以つて、従つて、せいゝ／＼勞力の増投によつて、生産物の商品部分を作り出してゐる。而して、機械が採用されるとしても——それも多くの場合遅れがちであるが——農民の中の或る限られたものによつて採用されるにすぎない。このことは、ドイツに例をとつて、すでにわれ／＼の分析したところである。すなはち、ドイツの農業は資本主義的工業の發展にとつ

1) Hacker and Kendrick, *ibid.*, p. 164.

ない機械使用の増加傾向を示してゐたが、しかし、一八九五年においてさへ、機械使用農業は全經營の僅か十六パーセントにすぎなかつた。しかしして、その大部分は大經營によつて採用されたものであつて大經營だけについていへば、九四パーセントは機械を採用してゐたのである。従つて、ドイツのこの例に對照して、ドイツにおいて機械を裝備した大經營が資本主義的な一つの企業であつたやうに、アメリカの商業的農業をまた資本主義的な性質を持つた企業農業であつたといふことができよう。それは、小農地帯の農民的經營が商業的農業を営んでゐるのは全然別個のものである。農民的經營がさうした場合に提供するやうになる労働者を雇傭し、機械を使用し、大規模に——といつても適度の大きいさといふものが存在するのだが——企業的な農業を営んでゐるところの、資本主義的大經營である。われ／＼は南北戦争に直接的な刺戟を受けてかゝる性質の農業企業が本格的に進行しはじめた、といふことを一應叙べ終つたことにしよう。

III 膨大な國有地とその開放

資本主義的經營は機械が挺子になつて成立してゐるし、従つて、機械が充分に活動できる大面積の農場を必要とする。機械の能力が改良の結果擴大されるならば、農場面積も擴張されねばならないであらう、さうでない限り、農業において、資本主義的經營は發展できない、——丁度、土地問題が重大性を

増して来たときに資本主義的大經營が退却して行つたやうに。

アメリカの農業は、この點で、最も恵まれた條件を持つてゐた。「農業革命に貢献した諸要素の中で國有地が存在してゐたといふことゝ、それを速かに私的所有に移す工夫をした政府の政策とは、最も留意すべきものであらう。——シユミツドは數字を擧げて次のやうに説明してゐる、——合衆國の全國土面積は一、九〇三、二八九、六〇〇エーカーにのぼる、その四分の三、すなはち一、四四二、二〇〇、三二〇エーカーがもと／＼國有地なのであつて、殘餘の四分の一は最初の十三州と、ケンタツキー、デネシー及びテキサスを含む四六一、〇八九、二八〇エーカーであつた。これらは聯邦政府の統制に服せず、従つて國有地に編入されなかつたのである。この廣大なる國有地のうち、一八六〇年までに政府が處分をつけた面積は三九四、〇八八、七一エーカーであつたのだから、まだ一、〇四八、一一一、六〇三エーカーにのぼる廣大な面積が残つてゐたのである。その大部分は國有地諸州及びミシシッピ以西の地域に横つてゐた。」¹⁾ アメリカの農業は實に十億エーカー——十億エーカーといへば、一八六〇年アメリカの農民が所有してゐた面積は四億エーカーであつたから、まさにその二倍以上の廣大さだ——の處女地に驥足をのばすことができた。

しかして、決定的に重要なことは、この十億エーカーの處女地が國有地であつたといふことである。封建制度の存在したヨーロッパの諸國においてならば、たとへ、未耕の處女地が存在してゐたとし

1) L. B. Schmidt, The Agrarian Revolution and the Settlement of the Far West (in Readings), p. 331.

ても、それにはつねに私的所有権がつきものであつた。だから、大農經營を營むにふさはしい廣さの土地が、農民的經營によつて分地されずにまだ残つてゐたとしても、資本はまだそれだけではその土地に資本主義的經營を設立することはできなかつた。私的所有権の阻止力を克服するために資本は一定額の貨幣を醸出せねばならぬであらう。それ故に經營の生産した商品農産物が、かゝる貨幣を苦痛なしに支出しうる程度に騰貴してゐる場合のほかは、たとへ幾十億エーカーの處女地が眼前に横つてゐたとしても、資本主義的な經營の設立は不可能である。尤も、資本を投ずる人が彼自身その土地を所有してゐるならば、必ずしも不可能ではないであらうけれども。

アメリカには封建制度がなかつた。だから、土地所有が存在しない、といふのではないが、とにかくアメリカでは處女地の所有主體は私人ではなく、聯邦政府であつた。處女地がこのやうに國有といふ形で管理されてゐたことが、アメリカの事情を全く別個のものにした。聯邦政府は、管理の方針を次のやうに變更して行つた。——「土地に關する立法は、一八三〇年及びその後において、現實の定住者に一定面積を賦與することを目標に置いた。占有法によつて、國有地借地人ははじめて土地に對する法律的所有權を獲得した。労働者たちは、彼等の賃銀と労働條件を改善しようとして、あらゆる時期において土地の自由を要求してゐた。一八四五年、家産法が議會の問題となつた。法案はその後しばしば下院を通過したが、結局上院では打破られ通しであつた。南部はきまつてかういふ遣り方に反對した。といふ

のは、さうしないでも、土地は自由な白人定住者には原則的に與へられる慣習になつてゐたからである。しかし、一八六〇年に、エーカー當り二十五セントを徵收するといふ條項を除けば、一八六二年の家産法と幾分類似してゐる一法案が議會を通過したのだが、これは次の二つの主な理由、すなはち、第一には、この法案は西部への移民を刺戟し、東部の土地價格を下落せしむるに至るであらう、第二に、すでに一ドル二十五セント、或はそれ以上を彼等の土地のために支拂つてゐる定住者には不公平だらうといふので、大統領ブカナンの拒否するところとなつた。¹⁾ かゝる幾變遷を経て、遂に一八六二年の歴史的な家産法の成立を見るに至つたのだが、その變化の中で一貫した流れともいふべきものは、要するに國有地の開放と、開放條件の緩和とであらう。だから、一八六二年の家産法——無償で一六〇エーカーの土地を五ヶ年間の定住者に賦與するといふ法律——は土地立法の一極點であつた、といへよう。

一八六二年の家産法制定の後も、例へば、一八七二年の兵士家産法——これは、定住期間の五ヶ年の中に在營年限を加算できるやうにしたもの——、それから一八七七年の荒蕪地法——これは、六四〇エーカーの土地を賦與する、その代り、三年以内に灌漑せねばならぬといふ法律——など、家産法の精神を擴大した幾多の立法が行はれてゐる。

ともかく、アメリカでは無償で土地を賦與した。このことは必ずしもアメリカに老大な處女地が存在してゐたといふことの必然的な結果ではないとしても、少くとも、この老大な土地を政府が所有してゐ

1) W. W. Jennings, A History of Economic Progress in U. S. p. 396.

たといふアメリカ特殊の事情の必然的な結果ではあらう。何故なら、私人の所有と異り、それが國有である場合には、管理の方針は經濟的の要求に適應せしめられるのであるから。南部の主張が敗れたのも次いで東部の地主の主張が蹂躪されたのも、それは要するに産業革命の壓力が如何に強かつたかを證明するものであらう。ともかくも無償で提供される、土地はこゝでは資本にとつてはなんら制約のない自由の活動舞臺である。これは、しかし、アメリカにだけ特殊な事情である。

一九一四年までのおよそ五十年間に家産法により私有地に編入された總面積は一四八、一四六、八三〇エーカー、アイオア州の四倍以上に相當する。その他の一聯の土地買収政策の實施により處分されたものを合計すれば、同期間中に七五七、三五二、四七五エーカーに達する。だから一九一四年にはもはや國有地は二億エーカーに減少してしまつたわけだ。しかし、その大部分は農業上の利用に不適な土地であつた、といはれる。¹⁾

IV 經營規模の擴大

これらの土地開放政策がアメリカの農業經營に特殊な好條件を提供したことは拒めないであらう。機械を使用することを技術的に不可能ならしめるところの土地の細分化から解放され、また土地價格のために經營資本の大部分を振り當て、機械費を消耗してしまふ不利益から救はれ、且つまた一般に農業へ

1) これらの數字は L. B. Schmidt, *ibid.*, p. 331. に據る。

の資本の流入を阻止されず済んだであらうから。

アメリカを全體としてみて使用農業機械の價値は一八六〇年から一九〇〇年の四十年間に二四六、一八、一四一ドルから七六一、二六一、五五〇ドルに増加してゐる。すなはち、約三倍以上になつてゐる。耕作面積がその間に擴大してゐるのを考慮に入れるために、一エーカー當りの機械價値を算出すれば、これは一八六〇年の六〇セントから一九〇〇年の九〇セントに増加してゐる。しかし、さうした全國的平均は問題でないであらう。問題は、一體、機械の使用はアメリカのどの地方で最も急速に増加してゐるか、といふ點である。それも、エーカー當りの機械價値の増加ではなく、一農業當りの増加について見ねばならない。何故なら、機械が改良を累ねられ、能率を高めるに従つてエーカー當りの機械價値は却つて減少するであらう。「一八六〇年においては一農場當り機械價値の最大だつたのはルイジニア州だつたが、戦争のため南部は打撃を蒙り、四十年後には一般に西部の農場が最も多く機械を使用してゐる、といふことになつた。」²⁾詳細な數字を以つて分析することのできないのは残念だが、機械分布の斑状態が地方別に、作物の種類別に、また經營形態の差異に應じて、顯著に生みだされてゐることはこのゼンニングスの言葉によつて推して知ることができらるであらう。借地制度を以つて分地農業が行はれるやうになつた南部の生業的な農業は機械に疎遠となり、處女地に擴大して行つた北部の市民的な農業は機械を採用して農場の規模を擴大した。

1) L. B. Schmidt, *ibid.*, p. 405.

2) Jennings, *ibid.*, p. 405.

アメリカ全體の一農場當り平均面積は一八六〇年以來縮少してゐる。しかし、この平均的な外衣は西部の諸州には全く通用しない。カンサス、ネブラスカ、北ダコタ、南ダコタ、モンタナ、イリノイ、アイオワ、ミネソタの諸州では次表の示す通り、農場面積は確實に増大してゐる。

アメリカにおける農場平均規模の變化（單位エーカー）

州	一八六〇	一八七〇	一八八〇	一八九〇	一九〇〇
カンサス	三九・〇	五一・六	七七・五	一三三・九	一四四・七
ネブラスカ	四二・六	五二・六	八六・八	一三四・二	一五一・七
北ダコタ				一六八・七	二二二・八
南ダコタ	一七・二	二四・八	六六・〇	一三八・七	二一四・五
モンタナ		九九・五	一七二・九	一六三・四	一二九・九
イリノイ	九一・四	九五・三	一〇二・一	一〇六・七	一〇四・九
アイオワ	六二・〇	八〇・八	一〇七・二	一二五・九	一三〇・八
ミネソタ	三〇・一	四九・九	七八・四	九五・二	一一九・二
全 國	七九・八	七一・〇	七一・〇	七八・三	七二・二

イリノイ、アイオワ、これらの州は上記八州の中でも最も早く開けたところだが、機械を使用しはじめたのも最古参であつた。アイオワ州において、戦争の頃、州共進會に出品された農業機械の種目が

1) G. A. Studensky, Entwicklung der Landwirtschaftlichen Weltproduktion, Weltwirtschaftliches Archiv, Bd. 31, S. 476.

一八五九年に二十六、一八六三年に一二六、一八六四年には一八一、一八六五年には二二一、といつたやうに激増して行つてゐることによつても、この州が機械に如何に熱心になつてゐたかわかるだらう。¹⁾その頃ではイリノイスとアイオワが最も大きな規模を示してゐた。しかし、一八七〇年代の終から八〇年代にかけて、イリノイスとアイオワを追ひこしてカンサス、ネブラスカ、南北兩ダコマ、モンタナの諸州が急に農場の規模を擴大して來てゐる。これらの諸州が土地開放政策と機械使用のコンビによつて優に前二者の域を追ひ抜いて資本主義的經營を確立して來た證左であらう。全國的には經營は縮小してゐるのに、かうした一群の諸州の存在することは全く注目して値するであらう。

前記の諸州についても州平均はまだ眞實を物語つてゐない。土地は比較的容易に入手できても、しかし、その土地を耕作する機械はさうではない。従つて資本力を異にする様々の定住者の間には經營規模の開きが存在する。資本力の弱い者の不耕所有地は大經營に合併されるであらう。また、部分的な、或は全部的な賃銀労働者となることもあらう。一八八〇—一九〇〇年の二十年間にこれらの新しい地帯において農業者の數は二八パーセント増加したが、農業労働者の數は七四パーセント増加した。²⁾かゝる事情を考慮に置くならば、これら諸州の支配的な經營規模は前記の平均的大いさよりもつと大となるであらう。

經營規模の變化につれて重要農産物の生産地帯が一變してしまつた。一八五九年には主要玉蜀黍地帯

1) L. B. Schmidt, *ibid.*, p. 326.

2) H. U. Faulkner, *American Economic History*, p. 429.

はイリノイス、オハイオ、ミズリー、インディアナ、ケンタツキー、テネシー、アイオワ、ヴァージニアの諸州であつたが、一八九九年にはイリノイス、アイオワ、カンサス、ネブラスカ、ミズリー、インディアナ、オハイオ、テキサスの諸州となつてゐる。注目すべきことは、一八五九年の諸州中、ミシシッピの西にあるものはたゞ二州だけだつたのが、一八九九年の諸州では大部分が西で、東は三つに減少してゐるといふことだ。次に主要小麦地帯についてみよう。一八五九年にはイリノイス、インディアナ、ヴィスコンシン、オハイオ、ヴァージニア、ペンシルヴァニア、ニュー・ヨーク、アイオワの諸州が主要地帯だつたのだが、一八九九年では、ミネソタ、北ダコタ、オハイオ、南ダコタ、カンサス、カリフォルニア、インディアナ、ネブラスカ——この八州で、一八五九年の生産量よりも、もつと澤山生産してゐる——、等々、千萬ブツセル以上の小麦を移出する州は二十に達した。二つの時點の比較は、一八五九年には一州だけがミシシッピ以西にあつたのが、一八九九年にはたゞ二州だけ東に残つてゐるだけにすぎない。何と簡明な、端的な對照ではないか。玉蜀黍、小麦に例示したやうな變化は大麥にもライ麥にもまたその他の作物にも、程度の差はあるが、見られる。¹⁾

作物地帯の移動は特に農業の發展を意味する。穀類及び棉花、この兩者は早くからそれ／＼北部と南部とを代表する代表的作物であつたが、しかし、北部の穀物も、その後、小麦地帯、玉蜀黍地帯、大麥地帯、ライ麥地帯、等々に次第に轉化されて行つた。酪農業も、蔬菜栽培業も、果實栽培も、養雞業も

1) W. W. Jennings, *ibid.*, pp. 400, 401.
L. B. Schmidt *ibid.*, pp. 370, 435.

その他、主要な農業のそれ／＼の部分が漸次に地方的に轉化される傾向を濃くして行つた。

×

×

×

以上、アメリカの農業のともかくも基本的な特徴を明瞭にした。強い程度に商品生産に轉形してゐたといふこと、そしてこの商品生産は機械使用の一般化——これは土地開放政策により資本の流入に對する障礙が撤去されてゐたので、アメリカでは特別に順調に進行した——を根底にしてゐたため、農民的小經營が一般にさうした現象をあらはすのとは本質的に異り、顯著に企業的な性質を有したといふこと、さらにまたこの商業的・企業的農業は夥しい移民の流れと劣弱な小經營から勞力を汲みとつてゐた資本主義的經營であつたといふこと、——アメリカの農業の特徴はかくの如くであつた。センサス・レポートの左の一節は一八七〇年の状態について、これらの特徴を次のやうに記述してゐる。——「一八七〇年のセンサスでは穀類生産諸州の農場は、最小の平均大いさのところでも、一〇〇エーカーを越してゐた。しかるに、舊世界においては農地の細分が行はれるのでしば／＼議論が起つてゐるが、それによれば大抵は二エーカー乃至一五エーカーといふ農業が問題になつてゐる。アメリカでは相當の穀物を生産するすべての諸州において五〇エーカーの農場、或は八〇エーカーの農場でさへも小農場と呼ばれてゐる。……家畜の生産においても、勞働節約的な機械の使用においても、小農業は最も不利な地位に立つてゐる。しかし、かうした農民的經營はアメリカには存在しない。のみならず、所有農業者の間には

1) cf. W. W. Jennings, *ibid.*, pp. 400, 404, and pp. 405, 407.

階級の區別もない。小所有者も社會的には大所有者と平等である、——富の開きから不平等が生れて來てゐるといふ一點を除けば、¹⁾七〇年代以後、經營規模はますます擴大した。經濟力の差異は、弱い部類の所有農業者を借地農業者に、また農業労働者に沈下させ、大經營の發展に貢獻した。アメリカの農業の特質が生んだ當然の推移であらう。

五 結 び——世界過剰生産

アメリカの農業の特異なるテンポの發展の基礎をそれ自體分析することを打切つて、その世界經濟的關聯の考察に立ち歸つてよいであらう。アメリカの農業をしてかくも特異なテンポの發展を辿らせたものは、南北戦争以後躍進しはじめたアメリカ經濟の發展であらう。それとともに、生産總額の中から巨大な分量を仕向けてゐた相手國、つまり、ヨーロッパにおける經濟の發展であらう。われ／＼は、もはや、後者との關聯と考察することに立ち歸つてよいであらう。

すでに土地問題の壓迫のために食糧農産物の供給に相對的な缺乏を感じてゐたヨーロッパにおいて、丁度イギリスが穀物法を撤廢して大陸の生産物に手を延ばして行つたと同じやうに、一八七〇年代に至ると、ヨーロッパが全體としてアメリカの生産物に手を延さねばならなくなつてゐた。このやうな事態はヨーロッパの資本主義的生長と、それに伴ふ土地問題の發展に負ふものであつた。七〇年代の最初の

1) Bogart and Thomson, Readings in the Economic History of the United States, p. 602.

數年間に至るまではヨーロッパの穀物價格は騰貴しつゞけた。かくして、アメリカの農業を充分に成長させると、こんどは、ヨーロッパの穀物は下落しはじめた。すなはちヨーロッパの資本はヨーロッパの土地問題の壓迫を現實に軽減しはじめたのである。

ヨーロッパの資本は、その頃、運輸業の産業革命を完成しつゝあつた。アメリカを、昔とは比較にならないほど緊密にヨーロッパに結合した。このことは、農業を世界的規模に發展させて、土地問題の壓迫からヨーロッパの資本を解放するのに功を奏した。一八四六年、イギリスの工業家たちが穀物法の撤廃をかちえたその頃のこと、イギリスの農業者たちに對してつぎのやうな慰めの言葉がさゝやかれてゐた、——「ダンチヒからイギリスの海岸にクオーターの小麦を輸送するのに運賃と保険料で十ポンドの費用がかかる、だから、穀物法を撤廢しても、イギリスの農業者はまさにそれだけの保護をうけてゐるわけだ。」¹⁾これは撤廢論者の闘將リチャード・コブデンの言葉である。いまにして考ふれば、これはイギリスの農業者たちを馬鹿にしきつたものだとしか受取れぬけれども、しかし、經濟史家の言に従へば、事實、當時のイギリス農業者たちの間にも、穀物法は撤廢されるも必ずしも大量の輸入は惹きおこされまいといふ安心が支配してゐたといふのだから、之は恐らく忠實に當時の運輸業の實狀を物語るものであらう。

しかし、それから三、四十年の間に事態は革命的に一變してしまつた。航海業は木造船と風力を棄て

1) L. C. A. Knowles, The Industrial and Commercial Revolution in Great Britain during the Nineteenth Century, p. 370.

、蒸汽力と鐵船を、鋼鐵船を採用した。運賃と保險料は激しく低落し、海洋といふ自然の障壁も、それが與えてゐた保護も著しい程度にとりのぞかれてしまつた。ダンチヒとイギリスの海岸を著しく廉價なコストで結びつけてしまつただけでなく、ヨーロッパとアメリカ大陸を、總じて世界的規模における緊密なる交通網を完成した。この期間の殆んど革命的ともいふべき發展の跡を辿ることはこゝでは無用であるが、鐵及び鋼鐵製の大型蒸汽船が走りだすやうになつて、一八七三年以降は蒸汽船の尖鋭な競争のために、従來帆船によつて決められてゐた海洋運送費は決定的に引き下げられねばならなかつた、といふことだけを左の數字によつて示して置かう。

イギリスまでの小麦一ブツセルの運賃の變化（金セント）

年	ニュー・ヨークより	オデッサより	カラチより
一八七〇年	一六・七	二六・三	三三・二
一八七五年	一五・一	一九・三	二五・一
一八八〇年	八・八	一四・〇	一九・九
一八八五年	六・三	一〇・五	一四・〇
一八九〇年	五・〇	九・四	一三・三
一八九五年	五・九	八・〇	九・三
一九〇〇年	三・五	七・八	一〇・四

1) Wheat Studies, Vol. X, p. 294.

上表は一八七〇——七四年及び一九〇〇——〇四年に至る三十年間の各五ヶ年の平均を示したものであるが、その間にオデッサ及びカラチからの小麦輸送費は約七〇パーセント、アメリカ小麦の輸送費は約八〇パーセント、ともかく極めて顕著な低落振りである。もつとも、この期間には總卸賣り物價も約三〇パーセント程度低落してゐる。しかし、それを考慮に入れても、この期間の海運界の顕著な變化を推知するに足る。

このやうに急速な海運業の産業革命の進行につれてヨーロッパのための食糧生産は廣汎な地域に擴張された。ヨーロッパの市場の構造もそれとともに一變した。アメリカ合衆國がヨーロッパ市場に決定的に乗り出して來たことは前言したところである。アメリカと最も似た條件を有し、アメリカとともに急速に世界市場に乗りだしたものに、カナダ、アルゼンチン、及びオーストラリアがあつた。これらの諸國——假りにA型の農業國と呼ぼう——の傍に、世界市場において大體に停滯的な位置をもちつゞけてゐるにすぎなかつた諸國があつた。ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、セルビア、ロシア——最初の三國の主都に因んでB型の農業國と呼ぼう——がそれである。最後に、むしろ世界市場から後退してゆく諸國があつた。インド、アルゼリアの如きである。左に小麦輸出國のそれらの純輸出量の逐年の變化を示すであらう。

各國小麥、小麥粉純輸出表

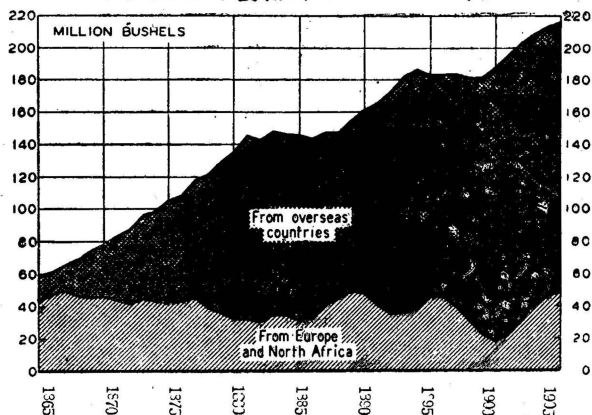
(單位百萬ブツシエル)

八月、七月	純輸出 計	合衆國	加奈陀印 度	アルゼ ンチン	濠 洲	ロシア	ハンガ リー	ニア マ	ブルガ リア	セルビ ア	アルゼ リア	エチオ ピア	ウルグ アイ
一八八五—一八六・	二六九、九	九六、六	四、三	四〇、八	二、二	—	—	—	—	—	—	—	—
一八八六—一八七・	三九三、三	一五六、八	七、二	三五、〇	六、八	—	—	—	—	—	—	—	—
一八八七—一八八・	三七二、六	一一三、九	三、四	二九、五	七、五	—	—	—	—	—	—	—	—
一八八八—一八九・	三五三、七	九一、〇	(一)	三〇、四	二、八	—	—	—	—	—	—	—	—
一八八九—一九〇・	三五五、九	一一二、五	(〇)	二七、一	九、三	—	—	—	—	—	—	—	—
一九〇〇—一九一・	三七一、九	一〇九、一	三、〇	四〇、九	一一、九	—	—	—	—	—	—	—	—
一八九一—一九二・	四三八、三	三三八、八	一〇、三	四四、六	一八、三	—	—	—	—	—	—	—	—
一八九二—一九三・	四三六、七	一九五、七	一一、〇	二六、八	三〇、六	—	—	—	—	—	—	—	—
一八九三—一九四・	四六〇、五	一六七、五	一一、〇	一九、六	五三、五	—	—	—	—	—	—	—	—
一八九四—一九五・	四八〇、三	一四七、七	九、一	二六、六	八、九	—	—	—	—	—	—	—	—
一八九五—一九六・	四三三、六	一三〇、三	一〇、四	二二、六	七、四	—	—	—	—	—	—	—	—
一八九六—一九七・	四〇七、〇	一四八、七	九、六	四、四	〇、〇	—	—	—	—	—	—	—	—
一八九七—一九八・	四七二、四	三三二、〇	二四、四	二〇、一	三、三	—	—	—	—	—	—	—	—
一八九八—一九九・	四四三、八	三二七、三	一五、六	二九、二	九、一	—	—	—	—	—	—	—	—
一九〇〇—一九〇〇	四四四、八	一九〇、七	二〇、〇	一〇、三	七、一	—	—	—	—	—	—	—	—

1) Wheat Studies, Vol. X. p. 343.

次にB型の農業國だが、この型の諸國が世界市場において停滯的な位置にあるのは、この種類の農業

イギリスノ小麦輸入 (1865—1905年)



しこの事情を参酌すれば、着實に増加の傾向を辿つてゐる。世界最大の小麦輸入國たるイギリス——従つて、イギリス市場は世界小麦價格の決定者なのだが——についてみれば、A型農業國の壓倒的な制覇は全く明瞭である。(上圖参照) 世界市場のメツカは他の一切の群小の市場を支配する、従つて、イギリス市場に覇權を樹立したところの國の農業——いまやA型農業國がさうであるのだが——が世界の一切の國々の農業を支配するであらう。しかして、A型の農業國がかゝる覇權にまで到着するに行つたのも、そしてまた堆高く世界小麦市場に滞貨を山積みするに至つたのも、この型の農業の資本主義的な性質の必然的行程であらう。

A型、B型、C型、それ〴〵の特徴がこの表の中に表現されてゐる。まづA型の農業國だが、資本主義的農業でも、自然的原因による豊凶はまぬかれえないのだから、年により激減することもあらう。しか

國では大部分の經營が農民的の小經營であるからである。それをもつと極端にしたものがC型の印度農業だ。いづれにしても、これらの型の諸國は、大多數の經營が生業として營まれてゐる。生業であるからそしてまた小規模の農業的經營であるから、商品として剩餘の農産物を市場に出すことは、すでにドイツの小農について數字を示して分析したやうに、むしろ偶然的事である。しかも、これらは資本主義の生長とともに彼等の家族の自足的經濟共同體が壞されてゆくに從つて、この本來の偶然事をむしろ常事とするに至る、——さうすること以外に貨幣經濟に適應してゆく途はないのであるから。ところで、かゝる部類の農民的經營が支配的に多數を占めてゐる、これらの型の國の農業が、大勢的に、A型の近代的農業に決定的に壓迫され、A型の生産費でしか、從つて低廉な價格でしか賣ることができなくなつたとしても、しかし、賣ることは彼等にとつては避けることのできない必要であるから、安い價格でもなほ賣りつゞけるであらう。いな、貨幣經濟に最少限度適當するために——例へば租税を納めるために——もつと多量の販賣を必要とするならば、もつと多量販賣することになるだらう。いはゆる飢餓販賣は農民的經營につきものである¹⁾。從つて、これらの型の諸國からの輸出量は價格の低落に刺戟されて却つて増大する。すなはち、ロシア、及びダニューブ諸國が一八九二、三、四、五年の恐慌期に最大の輸出量を示してゐるのもかゝる事情に負ふものであらう。小農民的經營の飢餓販賣は資本主義的農業の發展によつて却つて刺戟され、そして資本主義的農業とも滞貨の形成に貢獻するであらう。世界小麥滞貨の増

1) A. H. Hollmann, Die Agrarkrise der ost-und südosteuropäischen Staaten, Deutsche Agrarpolitik, Bd. III. S. 154.

大とそして十九世紀の世界農業恐慌の爆發は必至であつた。

後記 二回に亘るこの小論の中で私がとりあげてゐる主題目は、十九世紀末の世界農業恐慌において土地問題の演じてゐる役割を十分に評價すべきである、といふことを明瞭にしようとするにあつた。だから、小論の標題を「十九世紀末世界農業恐慌と土地問題の意義」とでもすればもつと内容を適確に表現しえたであらう。因みにかゝる問題をとらあげた所以のものは、土地問題の意義を十分に評價することは、十九世紀末世界農業恐慌についてなされたゼーリングとスツデンスキーとの論争に對して正しい批判を加へるために絶対に必要であると、それを讀んで感じたからであつた。